NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　4

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15325275

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, ロカ, レイラ, 子ヒュン, 勇者アバンと獄炎の魔王

事件発生。前半の「転」。
レイラさんは、原作準拠です。外伝要素は入れられませんでした。

Table of Contents

- あるべき未来に進むために　４

あるべき未来に進むために　4

第４章　崩壊

　アバンは、カール王との謁見が終わると、騎士団の詰め所に姿を現した。
　若い騎士が、すぐにアバンに気が付き、騎士団長のロカのもとに案内した。
　ロカは、この日の訓練が終わり、詰め所の奥の団長席で、日誌を付けているところだった。
　彼は、アバンの姿を認めると、走り書きの雑な字で、残りの日誌を適当に仕上げ、サインをした。そして、「済み」と書いた箱に放り込んで、さっさと仕事を終わらせた。
　アバンは、ロカに尋ねた。
「ロカ、いいんですか？」
「いいんだよ。日誌なんて本業じゃない。文字が書いてあればいいんだよ。」
　豪快なロカの物言いに、アバンも苦笑した。
　確かに、形式的業務など、どうでもいい。
　ロカは、アバンに尋ねた。
「陛下とのお話は終わったのか。」
「はい。」
　あまりにもあっけらかんとしたアバンの言い方に、ロカはため息を吐いた。
「・・・本当に、断っちまったのかよ。」
「ええ。」
「・・・しかも、旅に出るって？そこまで言ったのか？」
「はい。」
　ロカは、また、ため息を吐いた。
「あの坊主も連れて？」
「ええ。」
　ロカは、これまでの中で、特大のため息を吐いた。

「・・・お前も無欲だよな・・・。」
「それはどうも。」
「褒めてねぇ！呆れてんだ！！」
　急に大声になったロカに、アバンは目を丸くした。
　ロカは、怒りとともに言葉を吐き出した。
「俺はなあ！
　世界を救った勇者が！
　祖国で！
　大きな恩賞を受けるところを見たかったんだよ！！
　お前はそれくらいのことを成し遂げたんだ！
　それが何でまた・・・。」
　アバンは、両手を前に出して、ロカをなだめながら、必死に弁解した。
「い、いえ、ずっとカールに戻らないって言っているわけじゃないですし、ほら、私、ルーラも使えますから、ちょこちょこ帰ってきますよ。」
　フローラに言った言葉と全く同じ言葉を、アバンはロカに語った。
　アバンは、フローラを自宅に招き、彼女に初めて「カールを出る」と言ったとき、今と同じ言葉を彼女に言った。
　普段から気丈で、悲しみも不安も恐れも見せない気高い王女が、アバンが「カールを出る」と言ったとき、初めて泣き出しそうな顔を見せた。おそらく、彼女自身も、自分がどんな顔をしているのか理解していないような様子で。
　アバンは驚き、慌て、先ほどロカに言った言葉と同じ言葉をフローラに向かって投げかけた。
　あの常勝の姫騎士が、アバンの前で、そんな少女の顔をするとは、思わなかったのだ。
　アバンは、目の前のロカだけではなく、心の中の王女に詫びた。
「すみません、ロカ。これは私のわがままなんです。
　次の世代を担う責任があることも分かっていますし、私の持つ技術を引き継ぐ必要もあると思います。
　でも、どうしても、このままじゃ、いけない気がするんです。そ

の答えを見つけなれば。」
　アバンの真摯な表情に、ロカはこれ以上、怒る気をなくした。
　始めから、アバンを責めるつもりはなかったのだ。ただ、もっと、欲を出していい、アバンは、魔王を打倒した希望の勇者なのだから。
　ロカは、言葉を吐き出した。
「・・・お前がずっと言ってる、違和感ってやつだろ。
　わかってるよ。お前はそういうやつだ。なんだって、自分で確かめないと気が済まない。それがお前の力をこれまで伸ばしてきた源泉だしな・・・。」
　ロカは、ため息交じりに、そう言った。不本意ながら、彼はアバンを最もよく理解していた。
　アバンは苦笑しながら、この不器用ながらも自分のことを理解しようと努めてくれる親友に感謝した。
　しばし、沈黙が流れた。
　不意に、アバンは話題を変えた。
「それと、ロカ、ここのところ、何回か、ヒュンケルに騎士団の訓練を見せてくださって、ありがとうございました。
　どうでした？」
　突然出された名前に、ロカは一層不機嫌そうな顔をした。
　今日はため息の多い日だった。
　ロカはアバンに尋ねた。
「どうもこうも・・・あいつ、いまいくつなんだっけ？」
「６歳になったばかりだと本人は言っていますが。」
　アバンの回答に、ロカはげんなりとした。
　やっぱり今日はろくでもない日だ、という顔をしている。
「本当かよ、それ。
　だとしたら…とんでもねぇガキだな。」
「そうですか？」
　ロカは、ヒュンケルを連れて、騎士団の訓練を指導した時のことを思い出していた。

　ロカがヒュンケルを連れて、カール騎士団の詰め所に来ると、若

い騎士に声をかけられた、
「あ、団長！お子さんですか？かわいいですね。」
　ロカは、苦笑して答えた。
「ばかいえ、こんな大きい息子がいるかよ。こいつはアバンのところの養い子だよ。」
「へぇ、勇者様の・・・お子さんですか？」
「違う！」
　当のヒュンケル本人が強く否定した。

　カール騎士団は、少年兵も所属しており、その訓練は、成人の騎士団員が受け持っていた。
　カールの成人年齢は１６歳であり、これを超えた者は、正式な騎士団員、この年齢未満の者は、少年兵として、予備役扱いになっていた。
　少年兵とは言っても、せいぜい最年少は１０歳くらいで、いずれの少年も、ヒュンケルよりは、ずっと年上だった。
　その少年兵に混じって、ヒュンケルは、始めは見学していた訓練に次第に参加するようになった。
　基礎体力作りの走り込み、柔軟、模造剣を使用しての素振り、立木打ち、人間相手の打ち込みなど。
　カール騎士団が練兵に使用している広場には、打ち込み用の立木が何本も備え付けられている。少年兵は、そこに向かって、順次、打ち込みの練習をしていた。
　ロカは、少年兵と一緒に並ぶ、ヒュンケルにも号令をかけた。
「次！」
　訓練用の鈍らの剣を手にし、ヒュンケルが立木に向かって切り込む。
「浅い！」
　ロカの声が飛んだ。
「腰が落ちてない！体重が剣に乗ってないぞ。」
　ヒュンケルは、ロカの指摘に悔しそうな顔をしたが、それでも、ロカにうなずいた。
　何度か立木打ちで、木に切りかかる訓練をした後は、今度は、お

互いに少年兵同士の打ち込みになる。
　２人一組で互いに向き合って、一方が棒を横に構え、そこに向かって、もう一人が剣で打ち込む。
　ヒュンケルは、ほかの少年兵に比べて背が低い。そもそも年が幼いのだから仕方がない。
　ロカは、一応、組みやすいように、最も背の低い少年兵とヒュンケルを組みにし、打ち込みの練習をさせた。
「はじめっ！」
　ロカの号令の下、少年兵同士の打ち込みが始まる。
「・・・はぁっ！！」
　ひときわ大きな声がして、重い音が響いた。
　見ると、ヒュンケルが相手の構えた棒に向かって打ち込んでいる。
　重い一撃だった。
　受け止めた少年兵が、苦しそうな表情をしているのがわかった。
　そのまま、ヒュンケルは、素早く元の位置に戻り、また踏み込んで、次の一撃を打ち込んだ。
　その様に、ロカは、驚いた。
—早いな。それに重い。さっきとはえらい違いだ。
　ヒュンケルが３度打ち込んだところで、相手の少年は、耐えきれずに棒を落とした。
「やめっ！」
　慌ててロカが駆け寄ると、棒を取り落した少年は、顔をゆがめて痛そうに、自分の両掌を見ていた。

　ロカは、ヒュンケルの訓練への参加状況を思い出しながら、アバンに説明をした。
「・・・あいつ、意志が強いんだよ。相手を倒してやるって意志がさ。剣の型はまだまだ荒いし、腕力も弱い。丸太に向かっての立木打ちじゃあ、たいして切り込めていないのに、人間相手は全く違う。ただの打ち込みでも、だ。
　実戦経験のない予備役兵じゃあ、話にならない。まったく相手にならなかった。」

相手に向かっていこうとする強い意志。まだ粗削りだが、そこに体に流れる気が乗れば、それは「闘気」となって強い武器となる。
同じ戦士として、ロカは、すでにヒュンケルに、闘志を扱う素質を見ていた。
ロカの言葉に、アバンは楽しそうに笑った。
「うんうん、私と訓練しているときも、それは感じます。
しかし、現役騎士団長のあなたにそこまで言わせるとは。この先楽しみですねえ。」
ロカは、アバンののんびりとした口調に我慢ならず、声を荒げた。
「馬鹿、なにのんきなこと言ってんだ。あいつの矛先が自分に向くかもしれないって思わないのかよ！
隠してるけど、あいつは時々、お前のこと、すごい目で見てることがある。あいつがお前に剣を習う目的は、あいつが倒そうとしているのは、アバン、お前自身かもしれなんだぞ！？」
だが、ロカの怒声を全て受け止めながらも、アバンは、ひょうひょうとした顔を崩さなかった。
「まあ・・・ヒュンケルから見れば、私はお父さんの仇ですから、そうかもしれませんね。」
ロカは、大きくため息を吐いた。
アバンの言葉は、起こった事実の一面しか現わしていないことをロカも知っていたからだ。
「お前、あの坊主の親父の遺言、まだ言ってなかったのかよ。」
「いま言ったって、ヒュンケルには理解できませんよ。それよりも、もっと肌で感じてもらわないと。」
「何が。」
ロカは、いらだちを隠せないまま、アバンに詰問した。
だが、アバンは、ロカと対照的に、穏やかに微笑んでゆったりとした口調で答えた。
「バルトスさんの言葉の意味、あの人がヒュンケルに願ったことの意味をね。」
そのあまりにも聖人然としているというべきか、間抜けにのんびりとしているというべきか、アバンの口調に、ロカは毒気を抜か

れ、言葉を失った。
　アバンはつづけた。
「心配しなくても、時期が来たらいずれ話しますよ。バルトスさんが、ヒュンケルに何を望んでいたのかね。でも、それは、言葉で教えるべきものじゃないんです。」
　何を言っても聞かないアバンに、ロカは継ぐべき言葉を失い、黙った。
アバンは、ロカが呆れたのに気付き、必死で弁明をした。
「大丈夫ですって。私だって、ヒュンケルに恨まれたくないですし、殺されたくもありません。自分の身くらいは守りますし、そもそも、ヒュンケルに、そんな非道なこと、させたくありませんからね。」
　またも、アバンの口から、他人本位な言葉が出た。
　ロカは、大きくため息をつき、この話題を打ち切った。アバンに聞きたいことはほかにもあった。
「それで、今日はこれでもう帰るのか？」
　アバンは、首を横に振った。
「いえ、陛下が、せっかくなのでと、ごく内輪での酒席を設けてくださるとか。さすがに、それはお断りしづらくて・・・ロカも一緒に来てくれません？」
　アバンがすがるような目でロカを見て懇願した。
　ロカは、先ほどとは違う意味で呆れた。
　ヒュンケルに寝首をかかれるかもしれないことにはあんなに動じずに受け止めていたのに、たかだか酒席の１つくらいで何をこんなにうろたえているのか。
「・・・ひとりで行けないのかよ。」
「えらい人たち、苦手なんです。」
「フローラ様はなんなんだよ。」
「・・・ええと。」
　アバンは、答えに詰まって、視線を泳がせた。
　アバンがフローラと、お忍びで、ことあるごとに話し込んだり、お茶をともにしていることをロカはよく知っていた。
　ロカは、少しだけ、アバンの優位に立った気がして、留飲を下げ

ることにした。アバンの頼みを聞いてやろうではないか。
　それに、マトリフに頼まれてもいた。まさか王の酒席で襲われることはなかろうが、帰り道は危険だ。
「・・・まあいいよ。行ってやる。レイラには使いを出しとくよ。」
「ついでにヒュンケルにも伝言お願いします。遅くなるって。」
「知るか。」
　そう言いながら、ロカは、レイラ宛の手紙を書き、それを騎士団の少年兵に、ロカの家まで運ぶようにと言って、託した。

—レイラ。
アバンと一緒に、陛下のお席に、ご相伴預かる。
　今晩は、俺もアバンも遅くなるから、夕食はいらない。
　あの坊主は、俺たちの家に泊めてやってくれ。

　ロカの手紙を受け取ったレイラは、きっとロカが苦虫を噛み潰したような顔でこれを書いていたのだろうと思い、苦笑していた。

　ヒュンケルは、ロカの家の２階にいた。
「今日は、アバン様もロカも国王陛下に呼ばれて遅くなるそうだから、うちに泊まっていきなさい。」
　レイラにそう説明され、ヒュンケルは、レイラやマァムと一緒に、ロカ宅の寝室で寝ることになった。
　寝室には、もともとベッドが２つあったので、そのうちの一方をヒュンケルが借りることになった。
　夜も更けてきたので、マァムはすでに眠そうにあくびをして、レイラの腕の中でうつらうつらしていた。
　レイラは、しばらくマァムを腕に抱いて揺らしていたが、そのうち、マァムが目を閉じて、腕にずっしりとした重みを感じるようになると、レイラはそっとマァムをベッドに下した。
　レイラは、マァムをベッドに下すと、自分たちも寝ようと思い、ランプの明かりを消そうとテーブルに歩み寄った。
　ふと、そのとき、レイラは、窓が揺れるのを感じた。

風のない夜だったから、気のせいだったのかもしれない。
　だが、なんとなく、レイラは、胸騒ぎがした。
　レイラは、ちらりと、窓の外を見た。
　既にすっかり日は暮れており、月もないこの日は、各家の窓から漏れる明かりしかなく、周囲の道の様子は見えなかった。
　次いで、レイラは耳と肌に意識を集中させ、周囲の様子を感じ取ろうとした。家の周りの気配を探る。
　途端に、彼女の背を、冷たい汗が流れた。
　レイラは、ヒュンケルに気づかれないように、ベッドの下に隠していた剣を手前に手繰り寄せ、すぐに手に取れる位置に隠しなおした。
　ハンマースピアは、いつものようにベッドの脇に立てかけてある。手を伸ばせばすぐに届く。
　レイラは、素早く室内の様子に目をやり、武器の位置や家具の配置を頭に入れなおした。
　アバンに言われたとおり、玄関の上には、小袋を仕掛けている。
　レイラは、そっとマァムの横に腰を下ろし、いざというときには彼女をすぐに抱き上げられるように位置取りをした。
　すると、ヒュンケルがレイラの隣に歩み寄った。
「・・・レイラさん・・・剣、ありますか？」
　見ると、ヒュンケルは、真っ青な顔をしていた。彼の小さな手は、極度の緊張に震えていた。
　レイラは驚いた。
「・・・わかるの？」
　ヒュンケルは黙ってうなずいた。
「・・・囲まれてます・・・。」
「ええ・・・。」
　レイラは、今のこの家を取り巻く異常な空気を感じ取っていた。
　殺気に取り囲まれている。
　４人・・・いや５人くらいだろうか。
　武器を持って、殺気をみなぎらせた者たちが、すぐ外にいる。
　それを、ヒュンケルも感じ取っていた。
　レイラは、息をのんだ。

守らなければ。
　子どもたちを。
　レイラは、ベッドに座ったまま、目の前のヒュンケルを見つめた。まだヒュンケルは、座っている自分と同じくらいの目線の高さしかない。
　その小ささに、心が痛んだ。
　レイラは、足でベッドの下の剣を手繰り寄せると、ヒュンケルに差し出した。
　以前からレイラが使っていた、小ぶりの剣だった。
「私と一緒に、マァムを守ってくれる？」
　ヒュンケルは、両手で剣を受け取ると、黙ってうなずいた。

　ヒュンケルは、レイラから渡された小ぶりの剣を両手で持ち、自分の正面に構えた。
　レイラは、マァムを毛布でくるむと、何を思ったのか、ベッドの下に幼い娘を置いた。
　レイラは、ヒュンケルに呼びかけた。
「敵の狙いは、おそらくは、ロカか、私だわ。相手もロカがいないとは思っていないかもしれない。
　ヒュンケル、まさかあなたみたいな小さな子が反撃してくるとは相手も思わないでしょうから、あなたが打って出れば、必ず隙が生じるわ。
　そうしたら、走って逃げて。
　あなたが騎士団の詰め所に行ったときに通った道には、その途中に、この地域の自警団の屯所がある。そこが一番近いはずだから、そこまで行って助けを呼んで。」
　ヒュンケルは、レイラに異を唱えた。
「でも、レイラさん・・・マァムは・・・。」
「マァムは隠したわ。いくらあなたでも、マァムを抱いて走っては逃げられない。
　いい、ヒュンケル。あなたがいかに早く脱出できるかに、マァムの命もかかっているのよ。
　敵を倒すのではなく、とにかく、早くここを抜けることに集中し

て。」
　そうして、レイラは、真剣な目で、ヒュンケルを見つめた。
「あなたを信じるわ。必ず、助けを呼んでくれると。」
　ようやく、ヒュンケルはうなずいた。
　二人は、９０度に背中を合わせて立った。レイラが窓を向き、ヒュンケルがドアの方を向いていた。
　きんと、耳が痛くなる不審な静けさが流れていた。
　突然、静寂を破り、木が割れる大きな音が響いた。
　１階の玄関が破られたのだ。
　二人は身構えた。
　土足で階段を上がる音が響く。
　直後、寝室のドアがけたたましい音を立て大きくあけられた。
　同時に、窓が割れ、何かが飛び込んできた。
　その瞬間、ヒュンケルは床を蹴った。
「はぁぁっ・・・！」
　侵入者に対し、容赦なく切り込んでいく。
　相手は、顔を布で隠した男たちだった。
　ドアから入ってきたのは、３人。
　男たちは、ドアが開くと同時に向かってくる、一迅の風に気付き、足を止めた。
　その隙にヒュンケルは、相手の剣を振り払い、相手の隙間をすり抜けようとした。
「このガキ・・・！」
　だが、相手もすぐに剣の軌跡を戻し、ヒュンケルの行く手をふさぐ。
　凶刃が、少年に襲い掛かる。
　ヒュンケルは、レイラから渡された剣で、相手の斬撃を受け止めると、踏みとどまった。
　目の前に開けたかに見えた道は、ふさがれていた。
　レイラは、窓から飛び込んできた２人に対し、ハンマースピアで薙ぎ払った。
「勝手に人の家に上がり込んで、どういうつもり！？」
　レイラは、侵入者に対して声を張り上げた。

レイラは、ハンマースピアを大きく振り上げ、一番手前の侵入者の頭に振り下ろした。
　侵入者は、レイラの一撃を受けて昏倒した。
—・・・え？
　すると、もう一人の男は、レイラを警戒しつつも、彼女には向かってこなかった。
　ドアから入ってきた男たちのほうに近づく。
　見ると、いつの間にか離れてしまったヒュンケルが、すでに侵入者３人の刃に囲まれていた。
　彼は、敵の囲みを抜け出せていなかった。男たちは、なぜか執拗に、ヒュンケルに切りかかっていた。
　ヒュンケルは、何度もその攻撃を自分の剣で振り払い、受け流し、かろうじてかわし続けているが、はぁはぁと肩で息をしている。
「ヒュンケル！」
　レイラは叫んで、彼に駆け寄ろうとした。
　その時だった。
　侵入者の一人が、ベッドに向かっていった。
　何かを見つけたかのように、まっすぐにベッドに向かい、ベッドに手をかけた。
　力任せにベッドを押し上げると、その下から、毛布にくるまれた小さな姿が露わになった。
　侵入者は、左手でベッドを押し上げたまま、右手に持った剣を振り上げた。
　レイラは、血の気が引いた。
「マァムっ！！」
　異常を感じ取った愛娘が、火が付いたように泣き出した。
—間に合って・・・！
　レイラは悲鳴のような声で呪文を唱えた。
「バギ！」
　風の刃が男の背中を切りつける。
　男は、一瞬ひるんで、振り返った。
　だがそれでも、男は、足元の赤子に、執拗に刃を振り下ろそうと

した。
「マァム！！」
　ヒュンケルが叫んだ。
　切りかかってきた男たちの刃を押し返し、敵に背を向けるのも構わず、ベッドに向かって走った。
大人たちの足元をすり抜ける。
　ヒュンケルの目の前で、白刃が煌めく。
—駄目だ、間に合わないっ！
　ヒュンケルは、とっさにそう判断すると、剣を捨て、床を蹴って飛び込んだ。
　男の剣の下をくぐり抜け、小さなマァムに覆いかぶさる。
　そのまま、マァムを抱きかかえ、亀のように丸くなった。
　その次の瞬間。
　ヒュンケルは、背中に衝撃を感じた。
　途端に、力が入らなくなる。
　背中が熱い。
　それでも、彼はマァムを抱きしめる力を緩めなかった。ぎゅっと幼いマァムを抱きかかえ、丸くなる。
　レイラの悲鳴がいやに遠くに聞こえた。
「ヒュンケルっ！！」
　レイラは、ベッドをつかんだ男の後頭部にハンマースピアを振り下ろした。
　男はよろめき、右足を後ろに引いた。
　その隙に、レイラは、男とヒュンケルの間に割って入った。
「マァムっ！ヒュンケル！！」
　マァムの火のついたような鳴き声が続いていた。
　ヒュンケルの返事はない。
　床には、赤い染みが広がり始めていた。
　レイラは子どもたちをかばってしゃがんだ。
　男たちは、まだ、４人、白刃を構えてレイラを見据えている。
　レイラは唇をかんだ。
　この場で使うのは、自分たちも危険なためためらっていたが仕方がない。

レイラは意識を集中すると、一つの力ある言葉を口にした。
「バギクロス！！」
　先ほどよりもずっと巨大な風の刃が、いや、小さなサイクロンが、レイラの周りに巻き起こる。
「うわぁあっ！！」
　男たちの悲鳴が上がった。
　サイクロンは、部屋の中の調度や壁、天井までもを吹き飛ばし、渦を巻く。
　男たちは、壁にたたきつけられ、壊れた壁の隙間から外に放り出され、その身体自体をも風の刃に切り裂かれた。
　レイラは、ベッドの残骸で自分の身をかばい、ヒュンケルとマァムに覆いかぶさった。
　レイラを中心に巻き起こったサイクロンが壁を破壊し、天井を吹き飛ばし、その残骸が容赦なく彼女の上に降りかかる。
　身を挺して子どもたちをかばいながら、レイラは、ヒュンケルの背に右手を当てた。
　生暖かい、ぬるりとした感触が手に残る。
「・・・ベホマ！」
　レイラは、祈るような思いで、ヒュンケルに回復呪文をかけた。